

～輝きの子育て～

読書とネット社会

読書については、このコラムに何回となく書いて来ましたが、読書時間ゼロの大学生が過半数を超えたという記事を目にしました。

読書してないといっても、文字を読んでいないわけではないでしょう。むしろ、大量に読んでいると思います。インターネットやSNSを通じてです。

本を読まなくてもネットでいいのではないかと言う人もいます。すべての情報がネットの中にある時代です。大変便利な世の中になりました。

しかし、ネットで読むことと読書には大きな違いがあるとおもいます。

ネットでは、より面白そうなものへ、パッパッと短時間で次から次へと行ってしまいます。集中力が低下してしまうと思います。せわしく情報にアクセスしているわりに、どこかフワフワとして何も身につかない。その時は「なるほど」と思うが、すぐに忘れてしまいます。これでは、「深み」のある人生が送れないでしょう。

本には、人間社会を理解する上での全てが含まれていると言ってよいと思います。人間は途方もなく多様な存在で、自分では想像できないような考えや、経験を持つ他人がいることを知ることが出来ます。

そこから、人間の美しさ、醜さ、悩み、喜びが見えて来ます。自分の人生だけでは味わえない別の世界、豊饒な世界が広がっています。

文字を追う読書だけでなく、耳で聴くのも、想像力を働かせる人間的な行為です。

子どもへの読み聞かせが大切なのは、自由にイメージを湧かすことが出来るからです。

子どもは、言葉を聞いてイメージすることに慣れていませんが、情感を込めて読んであげると、抑揚や感情のり方を頼りに頭の中で映像化できるようになると言われています。

アニメは素晴らしい文化ですが、イメージを鍛えるのには向いていません。

宮崎 駿さんは、インタビューの中で、「子どもが気に入って『となりのトトロ』を何十回も見ています」と言うお母さんに対して「そんなことはしてはダメです」と言っています。「映像は見ていようが見ていないに係わらず一定のスピードで送り出される一方的な刺激ですが、絵本は違います。今のように子どもたちが映像に頼れば頼るだけ、これからは現実の生活の中で絵本を楽しむような時間が必要になってくるのではないですか。」(「折り返し点」宮崎 駿 著 岩波書店)

小さい時は、本が好きだった子どもが、大きくなると本から離れる原因は一体何でしょうか。

映像で提供されるものが、手っ取り早く、一目瞭然だからでしょうか。私にもよくわかりません。

紙の本以外に、e-bookもありますが、私の経験では、メモが書き込めないことや、あとで見るのに不便です。ライト小説や昔読んだ本の再読には向いているように思います。

テレビ、インターネット、SNS、DVD、とメディアは多様に存在しますが、想像力、イメージ力を育てるには読書だと言えます。大変、難しいことと思いますが、大人も子どもも何とか読書の習慣をつけたいものです。

片野 英司



参考

「読書という荒野」 見城 徹著 幻冬舎

「読書する人だけがたどり着ける場所」 斎藤 孝著 SB新書